

キ ト ロ ギ ア に つ い て

田 中 信 徳 (植物・名誉教授)

今年 4 月 11 日交通ゼネストの日に板橋 (帝京大・医) の私の部屋へ小堀先生から突然電話があって、理学部広報にキトロギアのことを書くようにとのお話があったので、少し創刊時代 (1929 年) のことを述べてみたい。私が編集同人となったのは 1960 年以降であるから、内容はもっぱら篠遠、和田両先生からの伝聞である。

キトロギアは現在、年 1 巻 (4 号) を編集発行し、1 巻の頁数 850 頁、定価 12,000 円、発行部数 1200 部。Advisory Board: H. Kihara, Y. Kuwada, H. Matsuura, and T. Morinaga. Editorial Board: S. Makino, N. Tanaka, B. Wada, and Y. Sinotô, Managing Editor. Editorial Referees: T. Iino, T. Ishikawa, Y. Kimura, Y.H. Nakanishi, M. Sasaki, D. Satô, K. Takewaki, K. Tsunewaki, T.H. Yosida, and A. Yuasa. ほかに海外 25 カ国

199 名の Standing Collaborators がいる。現在世界各国よりの寄稿論文は年平均 130 篇の多きに達し、印刷掲載を待機している。

国際細胞学雑誌キトロギア (Cytologia) は実業家和田豊治氏がつくられた公益法人和田薫幸会の援助によってつくられた。養子嗣和田文吾博士はやはり藤井門下の一人で、小石川植物園内の古い教室の研究室で私は机をならべていた。あるとき、薫幸会の援助金のはなしがでたとき、学術論文の発表雑誌の必要におよび、それには藤井先生に主幹 (editor) になっていただければきつとうまくいくということになった。そこで 2 人で先生をおへやにたずねた。先生のせまいおへやは、まわりの本棚にはいっぱい本や雑誌がいてあるばかりでなく、中央のテーブルの上にも、乱雑に (そうみえる) 山のようにつんである。その山のかげに先生と保井先生とが、テーブル

の上のわずかな空地で、しごとをしておられる。おそるおそる案を申しあげると、案の定、先生はおいそれとはうんといってくださらない。いろいろおはなしのあとでこういわれる。

“これはたいへんしごとである。もしこれを私がひきうけるとすれば、私は教育のことはやめるわけにはいかないが、研究はこのさいひとまずいっさい中止しなければならない。そのくらいの覚悟がなければ、この雑誌をよいものにするにはできない。返事はしばらくまってもらいたい。”

私たちは、私たちの軽いおもわくはひっくりかえされ、先生の真剣さに圧倒されてひきさがった。(中略)私たちは先生によばれてお返事をきくときがきた。“私はひきうける決心をした。しかしあらゆる計画は私にまかせてもらいたい。”とのお返事をきいてたいへんありがたかった。しかし私にとってはそれからがたいへんであった。私たちは藤井先生のことを、石橋を鉄の杖でたたいてわたるといっていた。キトロギアをはじめるにあたり、先生の“石橋鉄杖方式”はいかなく発揮されはじめたのである〔篠遠喜人：保井先生と藤井先生。採集と飼育1971(9)から原文のまま、文中、先生とあるは藤井健次郎名誉教授、1927年に定年退官、1929年にキトロギアを創刊され、1952年86才で逝去された。私とは現国際基督教大学学長、篠遠喜人先生のこと。和田文吾博士は本学名誉教授、和田薫幸会理事長、保井先生はお茶の水大学名誉教授、1971年92才で逝去されるまでキトロギアの同人として献身された藤井先生門下の一人。藤井先生は退官後も名誉教授として毎日研究室に通っておられた。この対話は1929年某日にあった〕。

印刷については藤井先生もしろろと篠遠先生らは大変な苦勞をなさっておられる。“これからは国際的でなければならないから、掲載論文はすべて英・独・仏の3カ国語にかぎり、日本語はやめよう”というのが藤井先生の構想であった。

誌名、紙質、組方、活字、印刷、インク、その他に關するご検討は並大抵のことではなかった。洋紙問屋博進社からあらゆる種類の印刷用紙の見本をとりよせている吟味したあげく、イギリスからの輸入紙が採用されたという。その後1937年に多くの顕微鏡写真を載せる

ため本文にもアート紙を使用することにしたのはキトロギアが世界に先鞭をつけたものである(和田による)。そのために藤井先生自ら製紙会社に出向かれ技術者に当時のアート紙の弱点を除く必要性を陳述され、何種類もの両面アート印刷紙の試作を依頼し、周到に吟味された結果、合格したのが三菱特両面アート紙であった。これの100听のものを藤井記念号に、90听のものを普通号の印刷用紙として使用しはじめた。特注は100連単位でなければ作ってくれないので、昭和17(1942)年5月に特注した100連の用紙が、実は戦時中、戦後の用紙飢饉時代をカバーしたのである。この手持用紙のおかげでキトロギアだけは一度も紙質を落したことはなかった。当時は學術雑誌の用紙も配給制となり、紙質は低下する一方で、しまいにはワラ半紙のようになり、量も制限された。そのみじめな姿は昭和22年ごろの学会誌をみれば一目瞭然である。藤井先生の深慮の一端がうかがえよう。

印刷を引受けたのは国際文献印刷社の笠井重治氏で、藤井先生の注文のすべて(活字はすべて特鑄であった)を受けとめてくれたという。キトロギアの校正の最終作業である“立合印刷”もはじめは印刷所はいやがったが、今だに連綿として毎号つづけられている。写真版、ことに電頭像を印刷する場合この立合印刷に際して実施される周到な注意がいかに大切であるかは内外の學術誌を比較してみると一目瞭然であろう。

キトロギアの編集は1929年から1970年までの41年間、植物学教室のなかで行なわれた。

キトロギアが世界の国際文化の交流に寄与した功績は故藤井先生への文化勲章の授与、仏政府からのレジオンドヌール勲章の贈呈などがあり、最近には昭和45年、出版文化国際交流会からキトロギア主幹篠遠喜人に対し定期刊行物として最初の国際出版文化賞が贈られた。今日までに登載した論文1,771篇、19,343頁、ほかにサプリメントが2,099頁ある。

キトロギアが今日あるのは東京大学理学部植物学教室の歴代主任をはじめ、多くの教室員の方々が創始者藤井健次郎、保井コノ、篠遠喜人、和田文吾らに対し、終始かわらず与えられた精神的ご支援によるもので心から厚くお礼を申しあげたい。